

Open Access International E-journal

高倉 直

(東京大学・長崎大学名誉教授)

1. はじめに

50年以上も特定の学会との付き合いが続くと、いろいろと軋轢を生じる場合も出てくる。ただ、研究を続けている場合は、その成果をどこかに公表することが必要で、そのためまず、所属学会への投稿を考えるのは普通であろう。ただ編集委員会との意見の違いや査読者の理解のなさから、結論から言うと、農業気象への論文投稿をやめてから、3年あまりになる。この間、利用してきたのがタイトルにある、インターネット上で世界中の誰でも無料で自由に読むことができる国際誌で、まだ、なじみの薄い会員も多いと思われるので、ここ数年の経験を踏まえて、その実態を紹介したい。

東京大学も名誉教授へのサービスとして、キャンパス外から図書館の多くの雑誌にアクセスできるようになった。海外の学会誌や Elsevier の出版する国際誌などの論文の PDF を読んだり、コピーをとることが無料でできる。国内誌に関しては多少の遅れはあるものの、J-stage のサービスがあることは周知のことであろう。地方で研究生活を営むものには、かけがえのないものであり、時代が E-journal へと進んで行くことを肌で感じる昨今である。

2. 昔話

2.1 国際誌 *Agricultural and Forest Meteorology* との関係

Elsevier から出版されているもので、その前身は 1964 年に刊行された *Agricultural Meteorology* である。正確には覚えていないが、その出版に際して、先輩格の日本農業気象学会に意見を聞いたようで、Vol. 1, No. 1 の編集委員に鈴木清太郎先生の名前があることから、三原義秋先生の推薦によるのではと推察する。その後、私が編集幹事の時にも多少のやりとりがあり、編集委員の追加の要請で、当時会長の三原義秋先生を推薦した。編集幹事を辞めてからは、詳しいことは知らないが、同様な関係は続いたと思う。

1973 年のオランダ留学の成果は *Agricultural Meteorology* に投稿した (Takakura *et al.*, 1975)。当時は、別刷りがほしいときはそれ用のハガキを作って、それを著者に送って、別刷りを送ってもらっていた。一つには自分も同じような研究をしていると言うことを知ってもらうこともあったと思う。私がいただいたハガキはファイルで大切に保管していたが、時代と共に廃棄した。この論文と *Trans. ASAE* に掲載された論文 (Takakura *et al.*, 1971) は他の海外で論文賞をもらった論文よりも、30 年以上も後でも、過去 10 年間の引用回数が桁違いに多かったのには驚いた。

2.2 養賢堂から技研プリントへ

今回、せっかく E-journal 化していた生物と気象の印刷化がはじまったのを機会に、養賢堂からまた他の印刷会社へ移されたが、私が幹事の時も、学会の財政事情から養賢堂からいくつかの出版社を経て、最終的に大塚にある技研プリントへ移さざるを得なかった。技術的には大変しっかりした会社であったが、その意味、職人的で頑固な面もあり、何度も大塚へ足を運び、多くの時間をとられたが、今となっては楽しい思い出である。学会誌の表紙も思い切って現代風に変えた。掲載される英語の論文が多くもない時に雑誌名を英語にしたのは、いささか先走り感はあるが、いまも J-Stage をみると、学会誌が英文タイトルであり、四角の農業気象のデザインがそのまま使われている。今回の変更も、時代の流れに即しているのかどうか。薄くなった両学会誌を見ながら感じる昨今である。

3. Open Access International E-Journal

いつ頃からであろうか。インターネットで、さかんに投稿の勧誘が来るようになった。ただ内容がまったくわからないので、敬遠していたが、前述の理由から、思い切って投稿してみることにした。まさに案ずるより産むがやすしである。この 3 年間に 4 報投稿し、公表されている。

最初の下地を作ったのは Takakura *et al.* (2009) である。この論文は最初 *Trans. ASAE* へ投稿した。ところが運悪く、温室の論文であるのに、*Soil and Water Section* へ回され、Co-editor である人が、Penman-Montheith の絶大なる信奉者で、彼らの式に代わる提案をしているのに、全く理解してくれなかった。しかたなく、農業気象に投稿したが、再び結果は同様であった。神様のような存在に弓引いたということであろうか。その結果、*Biosys. Eng.* へ投稿し、やっと日の目を見た。興味があれば、是非、この内容に関しての解説である高倉 (2009) を参照してほしい。

その後、2 回ほど別の論文で、農業気象の編集委員会とのやりとりがあり、その結果、現在の心境に至った次第である。

Open Access International E-Journal の利点は、世界に無料で開かれていること、投稿や査読で人間的なしがらみがないこと、投稿から公開まで早いこと、私が現在利用しているものは投稿から公開まで約 3 週間以内である。また、投稿料も US\$100 である。PayPal での支払いが可能である。私は IF など気にしないが、1 前後と現在の農業気象よりかなり高い。これからその利用度はますます多くなることが予想され、その数値も高くなるであろう。

必要もないので、出版企業はどこにあるか調べていない。CIR World という会社で、約 20 種類の論文誌を出版している。そのため、投稿の最初に、どの雑誌への投稿かを選ぶ必要がある。テンプレートを使用した論文を送ることに

なるが、Elsevier の場合同様、査読者の推薦もできる。ただ、基本的な査読はどれもコンピュータで行っているようで、メールでのやりとりがちぐはぐな場合もあるが、対応は大変親切で、修正の要求などには、最終的には編集者が対応していると思われる。

文献リストに4報挙げている (Takakura, 2014 ; Miyahira *et al.*, 2015 ; Akutsu *et al.*, 2015 ; Takakura *et al.*, 2017)。若い人や他分野の研究協力者に著者の順位は譲っているものもあるが、すべて私が corresponding author である。

4. おわりに

勤務地が変わるごとに、オフィスにある関連文献や参考書、さらに学会誌をどうするかが悩みの種である。次の勤務地が明確な場合はそこへ送付すればよいが、今回のように自宅となると、問題で、印刷された関連文献は、必要なときは上記の方法で見ることができるので、破棄し、参考書と学会誌は図書室にすべて寄贈した。これからますますペーパレスの方向で考える必要があると思われる。

近い将来、我が国の中小学会で英文学会誌を刊行しているところが、ここで紹介したようなところに業務を委託することは十分考えられる。

近々、寄贈されてくる3学会の学会誌送付を辞退する予定である。

引用文献

- Akutsu M, Sunagawa H, Usui T, Tamaki M, Taniai N, Hirata M, Kaiho A, Takakura T, 2015: Non-destructive, real-time, and automatic measurement of transpiration from a plant canopy stand. *J. Adv. Agr.* **5**, 677-683.
- Miyahira M, Tamaki M, Akutsu M, Usui T, Okushima L, Kaiho A, Takakura T, 2015: Calibration device development for spherical solar radiation sensors. *J. Adv. Agr.* **4**, 371-376.
- 高倉 直, 2009: なぜ、いまだに世界中で Penman-Monteith 式なのか? 農業および園芸 **83**, 953-957.
- Takakura T, 2014: Harvesting the sun efficiently. *Academia J. Agr. Res.* **2**(1), 001-002.
- Takakura T, Jordan KA, Boyd LL, 1971: Dynamic simulation of plant growth and environment in the greenhouse. *Trans. ASAE* **14**, 964-971.
- Takakura T, Goudriaan J, Louwse W, 1975: A behavior model to simulate stomatal resistance. *J. Agr. Met.* **15**, 393-404.
- Takakura T, Kubota C, Sase S, Hayashi M, Ishii M, Takayama K, Nishina H, Kurata K, Giacomelli GA, 2009: Measurement of evapotranspiration rate in a single-span greenhouse using the energy-balance equation. *Biosys. Eng.* **102**, 298-304.
- Takakura T, Sunagawa H, Tamaki, M, Usui T, Taniai N, 2017: In site net photosynthesis measurement of a plant canopy in a single-span greenhouse. *J. Adv. Agr.* **7**, 1015-1020.